

い

い

で

い

い

で

す

「ここがいいです」と言った事がほとんどない。「ここでいいです」と本当に遠慮して言うか、そうは言いながらベストの場所を取るかのどちらかだ。僕は今は名古屋に住んでいて、名古屋が大好きだし街の感じもちょうどいいけれど「ここがいいです」という理由は思いつかない。東京には絶対に住めないと思ったけれどこの夏ひと月暮らしてみてもとても楽しく過ごせたと、まだまだ居たいと思ったし、結局仕事さえあればどこでも良い訳で、かと言ってどんな仕事でも良いって訳でもないし、何事においても「ここでいいです」という感じで生きている、という事が分かりました今回。

登場人物 男1／花田欽也

男2／島勇作

女1／小川あけみ

男3／近所の人1・新聞屋さん・大家さん・大家さんの兄

女2／千恵子

男4／近所の人2

男5／刑事さん

男1に続いて女1、そのやや後に男2が付いてやってくる。

女1 (地図を見ながら) この辺じゃない？

三人、立ち止まる。

男1 勇作さん、今、風呂屋の前なんですけど…

男2 …。

女1 その角、曲がった辺りじゃない？

男1 あ、ホント？…勇作さん、

男2 …、ん？

男1 じゃあ僕らここで待ってますんで。

男2 …、え？

男1 行つて来ててください！

男2 …。

男1 さ、勇作さん。

女1 まあ、心の準備がね、

男1 …六年、でしたっけ？そりゃあ恐いですよね…。

男2 …、ちよつと、エンジン止めてくれる？

男1 はい。

男2 ありがとうね、二人とも。

男1 いえ。

男2 まさか本当にこゝまで送ってくれるとは思わなかったから、

男1 そんな。

男2 ありがとうね。

男1 いいですよ。

男2 この辺りも随分変わってしまった、私が居た頃とはもう…、

男1 町は変わってしまったって、変わらないモノはありますよ、奥さんの気持ちです。

男2 …、ん？

男1 さあ行つて来て下さい！

女1 せつかく上手い事言つたと思つたのにな。

男1 さあさあ！

男2 その角を曲がった辺り、なんだね…。

女1 自分の家じゃないの？

男2 元々妻が住んでいたマンションに私が転がり込んだのが最初なんです。

女1 ああ…。

男1 その角曲がったら見えるんじゃないですか？黄色いハンカチ。

男2 … (恥ずかしそうに笑う)。

男1 手紙、送つたんですよね？だつたら見に行かないと。

男2 … (可笑しさがこみ上げてくる)。

男1 「もし、まだ独り暮らしで私を待っていてくれるなら、ベランダに黄色いハンカチをぶら下げて

おいてくれ」そうやって書いたんでしょ？

男2 … (笑うのを必死にこらえる)。

男1 何がおかしいんですか？

男2 いや、今時黄色いハンカチなんてよくもまあそんな、ハハハ。

男1 大丈夫ですよ、掛かってますよ絶対。

女1 またそうやって期待させると、

男1 掛かっているに決まってるんだろ。

男2 …。

男1 さあ、行つて来て下さい！

男2 妻は、もう私の事なんか待っちゃいないだろう。そんな事は分かっているんだ。分かっているんだけ

どね

男1 まだ分かんないじゃないですか。

男2 まあ分かんないんだけどね。

男1 …それを確かめに来たんでしょ。

男2 まあそうなんだけどね。

男1 ……じゃあ見て来て下さいよ。

男2 …、妻はね、甘い物にホント目が無くてね、手土産にケーキでも買ってあげれば良かったかな。

男1 それも確認してから、黄色いハンカチが掛かっているのだから、堂々と買って帰りましょうよ。

男2 そうだね。掛かってないのにケーキ買っててもね。

男1 ええ。

男2 ケーキ買って玄関先に置いておこうかな。

男1 …まず、確認してきましょう。帰って来て、玄関先にケーキ置いてあったら恐いですよ。

男2 そうだね。

男1 ……さあ！

男2 …、モンブランがね。

女1 はよ行って来やあ！

男1 アケミ…、

女1 何をぐちゃぐちゃ言ってるんだおつさん、何しにここまで来たの？行って来やあて。

男1 勇作さん、せつかくここまで来たんですから。ね。

男2 ちよつと待って、一旦落ち着きたいんだ。

男1 まあ分かりますけどね…、

女1 はあ？

男1 あのね勇作さん、コメダ行ったら落ち着き過ぎちゃいますから。行くの余計恐くなっちゃいますから。

男2 そっかな。

男1 見ないと、何も始まりませんよ。

女1 終るかもしれないしね。

男1 そついう事を言っんじゃないよ。

男2 そおかなんだなんかおかしいと思った今日はアレだ、うんちしてないや。ちよつと胃腸が芳しく  
ないんだ、

男1 勇作さん、

男2 最近はコロコロってした鹿みたいなんちしか出ないからなんかおかしいと思うんだ、

男1 このまま確認しないで帰るんですか、そんな事出来ないでしょ？

女1 私見て来てあげようか？

男1 勇作さんが見ないと意味ないだろう。

女1 全然行かないじゃん。

男1 せつかちだなあお前は。

女1 ねえおじさん、無いと思ってるなら尚更気が楽じゃん。無い無い、もう無いよ、有る訳ない。

男1 お前はもうしてそつデリカシーが無いんだよ。

女1 もう行って来なさいってほらあ。

男1 ちよつと降りてみませんか？ね、一旦。

男1と女1、降りる。というかその場から離れる。

男1 あー、腰痛い。走ったなあ、

女1 かしなんにもないなあ、

男2、じつとそこにどどまっている。

男2 ……その角、なんだね。

男1 そつですよ。すぐ、そこです。

男2 ……すぐそこだな。

女1 そこまで出たら見えるよ。

男1 勇気出して、大丈夫ですから。

男2 その、角なんだね？

女1 降りやあて、はよ。

男2 その角を曲がれば、見える…。その角を、ちよつと覗くだけだ…

女1 はよお、降りやあて。

男2 ……

女1 はよ。

男2 掛かってなかったら、しばらく付き合ってくださいね。

男1 もちろん！

女1 はよ降りやあて。  
男2 掛かっていたら、(ニニ)でお別れですね。  
男1 良かったじゃないですか。  
女1 はよ。  
男2 でも掛かってなかったら、  
女1 もうー行くよ。

女1、その角に向かって歩きます。

男2 あー！ちよつと待って下さい、行きます。私、行きますから。  
女1 はよ行って来やあ。  
男2 …(車から降りて) この辺りに、こんなに家は無かったんだよ。  
女1 はよ…。  
男2 しかし静かなのは変わらない。うん、良い所だ。  
女1 はよ…。  
男1 勇作さん、  
男2 このアパート、部屋空いてるなあ。  
女1 住む気?!  
男1 勇作さん?  
男2 エイブルどこかな…、  
男1 勇作さん勇作さん、まず見てから、ね、そういう事は。  
男2 違う違う、一旦ちよつと物件をね、見るだけ、見るだけだから、  
男1 うんうん、そんなの今する事じゃないんですよ。  
男2 ちよつと眠たくなって来ちゃったんだ、  
男1 我慢しましょうか。  
男2 眠い、なんか眠たくなって来ちゃった、  
男1 まず見てからね、  
男2 見たら寝れないかもしれないもの！  
男1 見なくても寝れないでしょ！  
男2 …うん。  
男1 だから、まず見て、そこから考えましょう。ね？

男2 …今日はさ、日が悪いよ君。  
男1 …え？  
男2 まず身を清めて、からじゃないと…という事は何事も  
男1 勇作さん…、  
女1 ダメだこいつ。

男3、その角の向こうから歩いてくる。

男3 変わった家だなあ、なあんであんなところに犬の

男1、咄嗟に男3に飛びかかり頭にビニール袋を被せ、首を捻って殺した。

男1・女1 ……!!!!!!!!!!!!!!  
男2 …だつてこいつ、なんか言おうとしたからさ、  
男1 あんた何やってんだよ…、  
男2 だつて、なんか言おうとしたでしょ？  
女1 犬の…？  
男2 …なんか言おうとしたでしょ？  
男1 …(男3に) もしもし？もしもし？  
男2 だつて、だつてさ…、

女1、キョロキョロと、

男1 どこ行く気？  
女1 警察…、  
男1 勇作さん仮出所なんだよ？  
女1 じゃあどうすんの？  
男1 …、  
男2 だつてなんか言おうとしたでしょ？  
男1 だからってこんな事しちゃダメでしょ？  
男2 だつて、だつて、

男1 あーどうしよう、どうしようか、  
女1 どうしようって言われても…

男2 ちよおそつち持って

男1 え？

男2 と、とりあえず車に、

男1 …、

男2 ここに置いとく訳にいかないでしょおが！

男1 あ、ああ、

二人 男3を車のトランクに入れるという動作。

女1 ねえ、え？

男2 お前はよエイブル行つて来いて！

女1 はあ？！

アパートの一室。

男1 信じられない…。普通はこんな急に借りられないものなのに、

女1 隣、大家さん住んでるよ。

男1 あ、じゃあ直接？

女1 うん。

男1 それにしても、

女1 なんか喜んでたよ。

男1 ガラガラなのかなあ…。

男2、部屋の隅の方で膝を抱えて震えている。

女1 あの、明日、なんか書類持って来るそうなんです。

男2 あ、はい。

女1 お願いしますね。

男2 いや、本当に…、何から何まで、すみませんでした。落ち着いたら、ちゃんと、ケジメは、つけ

ますんで、迷惑掛けないように、その、

男1 …いつ見に行くんですか、黄色いハンカチ。

女1、呆れて男1を見る。

男2 …それも、その、落ち着いたら、今はまだ、その、眠たいんで、ええ、

女1 じゃあもう行こうか。

男1 でも…、

女1 する事ないじゃん居たって、ここまで連れて来てあげたんだし。

男1 まあそうだけども…、

女1 おじさん、

男2 ん？

女1 じゃあ私達、行きますね。

男2 …あ、行く？

女1 うん。

男1 …はい。

男2 ああ…、あ、なんかホント、すいませんでした。

男1 大丈夫ですか？一人で、見に行けますか？

女1 行けるって。

男1 あの、見に行くの恐れかもしれないですけど、ちゃんと見に行つた方がいいですよ。

男2 うん、それはわかつてるよ。うん。行くよ、行く。

男1 ええ。

男2 そりゃあ見る時は、ちゃんと見るから私は、自分の目で、必ず。

男1 うん。

男2 だからさその、勝手に見に行かないでね、

男1 …え？

男2 その角から、私より先に、

男1 …ああ、

男2 私は、私が見るから、私の目で、私自身が、そうでないと信じないから、

男1 はい、分かりました。

男2 …うん。まあ欽也君はさ、信用出来るんだ私は…、アケミお前だよ。

女1 おい慣れ慣れしく呼ぶんじゃねえよ。

男2 君見に行かないでよね、私は自分で見るんだからさ。

女1 じゃあ行けよはよ。こんな所に部屋借りてさ、ハンカチ掛かってなかったらどうすんの？

男2 私には私のタイミングって言うのがあるんだからさ。

女1 うるせえよバカ。

男1 あ、じゃあ、お元気で。

男2 あ、うん…。

男1 じゃあ…。

男2 ありがとう。ありがとうね(深々と頭を下げる)。

女1 (出て行くこうとするが) どうすんのアレ？

男1 え…？

男2 あ…、あ、あ、じゃあ、いいよ置いてって、

男1 え？

男2 押入れ、入れといて。

男1 …はい。

男1と女1、車に戻り、男3をビニールシートにくるむ。

女1 なんで私がこんな事せんといかんの？

男1 しょうがないよ、渡りに舟だ。

女1 乗りがかった舟でしょ？

男1 ああ、そうとも言うんだ…。

女1 あんたホント気が良いって言うかバカって言うか、

男1 早くしてよ、誰かに見られたら大変だ。

女1 これ、二階まで上げられる？

男1 うん…、しょうがない、もう上げた事にしようか、

女1 は？

男1 もう、上げた事にしよう。

女1 …え、何言ってるの？

男1 もつやいのやいの言わないで、俺ももつパニックだからさ。

二人 ビニールシートだけをひよいと持ち上げ部屋へ。  
男3は立ちあがり、颯爽と去る。

男2 はいこつちこつち、重かったでしょお。

男1 あ、ええ…。

男2 ほら収納も広いよお、見て、

男1 あ、じゃあここで、よっこいしょと(押入れに投げ入れる)。

男2 ホント偶然見つけた部屋にしちゃ良い所でしたね。

男1 そうですね…。

男2 窓も大きいし、…あれ、ちよつとコレ…、おい、お、うわ、ちよつと、角の向こうの家とか丸見

えじゃないか！

男1 え？

男2 ちよつとビニールシートも無い？ビニールシート。

男1 ビニール…

男2 ちよおビニールシート持って来てえ！持って来てよビニールシート！

女1 声、声がでかい、

男2 持ってえ、持って来てえお願いだから！

女1、先ほどのビニールシートを放り投げる。

男2 持ってえ端っこ持ってえ、ちよつと持ってえ！一人で貼れる訳ないでしょうがぁ！

男1と男2、ビニールシートの端を持って、二人で窓全面に貼り付けた。

男2 あーこれで安心だ。危なかったね。見えちゃうところだったね(ニコニコ)。

女1 …何笑つとんだ。

男2 見えちゃうところだったよ。はーあ。

男2、部屋の隅で体操座り。

男1 勇作さん、

男2 ん？

男1 逃げちゃダメですよ。逃げずに先に進めば、必ず道は開けます。僕ね、勇作さんの気持ち分らないでもないんですよ。僕も大学生の頃、似たような経験した事がありましてね、あれは僕が、

男2 それ大学の時の話でしょお？私の事今いくつだと思ってるの？もう四十ですよ。四十と大学生とはもつ全滅違いますからね状況が。

男1 ……うん、そうかもしれないですけど、その時の僕は

男2 聞かないですよそんな話は、大学生なんてバカばかりなんですから、大学生の話をなんで四十の私が聞かずにやなんのですか。

男1 いや参考になるかもしれないと思って、

男2 参考になんかならないよ絶対。私の事は私が一番良く分かっているんですから。え、欽也君私じゃないでしょ？欽也君が私だったら聞きますよちゃんと。でも欽也君私じゃないでしょ？だって欽也君が私だったら私も欽也君ですからね？私も欽也君も欽也君だったら私はどこへ行っちゃったの？私居なくなるじゃないの。そんな事は絶対にさせませんからね。私を守るのは私しか居ないんですからね。

男1 ……なんかよくわからないんですけど、

男2 ほら分かんないじゃん。私の事なんか欽也君に分かる訳ないじゃん。

男1 いや分かんないでもないなと思つて、

男2 分かつてなかつたじゃん今の話

男1 いや、

男2 もう帰つて。もう用は済んだでしょ？もう帰つてえ。私と一緒に居るとロクな事にならないですよ。もう私もお二人にこれ以上迷惑掛けたくないんですもう帰つてちよ。

男1 ……

女1 行こう。

男1 でも

男2 もう帰つてちよ、二人してバカみたいな顔して、もう帰つてちよ！

女1 ほら、

男1 う、うん…（渋々立ち上がる）、

男2 （立ち上がり）ありがとだね。ほんとありがとだね。

男1 じゃあ勇作さん、

男2 ありがとだね！

男2、二人を締めだし、また部屋の隅で丸くなる。  
二人は外に出て、

女1 頭おかしいんだよあのおっさん。

男1 大丈夫かな…。

女1 人の心配しとる場合じゃないでしょお。うちらもこれからどうすんの？

男1 ……仕事、見つけないとね、

女1 そうだよ（地図を開く）、貯金もそろそろ無くなりそう。

男1 僕らはどこに向かえばいいんだろっ、これから。

女1 とりあえず今から、どうする？

男1 もつと南に行つてみますか？

女1 寒くなつて来たしね、

女1、角の方へ歩き出す、

男1 アケミ？

女1 ちよつと見て行こうよ。

男1 やめときなよ、

女1 だつて気になるじゃん。

男1 ダメだつて、勇作さんが見ないで欲しいつて、

女1 もう二度と会わないんだからいいじゃん。

男1 悪いよやっぱそれは、

女1 あんたほどの堅物、今時居ないよ。

男2、外に出て来ていて、

男2 あの、

男1 わ、あ、勇作さん、

男2 お二人とも、先ほどはすいませんでした。

男1 あ、あ、いえ…、

男2 ちよつと頭に血が上つてしまつて、ほんと申し訳ない。



男1 いやいや、いいですよ。僕も、なんか偉そうに言ってますよ。

男2 お一人とも、今日行くところはまだ決まってるんでしたら、うち泊まってるいきませんか？あの

部屋、2DKもあるから、部屋、空いてますから。

男1 ……どうする？

女1 (首を振る)。

男1 車で寝るのも、しんどいだろう？

女1 ……

男2 明日、朝早く、見に行きませんか？

男1 ……え？

男2 一緒に。黄色いハンカチ。お願いします。

男1、女1を見る。

女1 ……

再び部屋へ。

男2 さっき占いたらね、

男1 え？

男2 明日が、イイみたいなんだ。

男1 あ、そうなんですか。

男2 うん、明日はイイ事がある、そういう事になってたんだ。

男1 あ、勇作さん占い出来るんですか？

男2 うん、占いはね、昔から良くやるんですよ。

男1 へえー、当たるんですか？

男2 まあ、自分で言うのもアレですけど、結構。

男1 凄いい、占って欲しいな。

男2 いいよ。何占って欲しい？

男1 そつすねえ…、あ、じゃああの、僕は、どこに行けばいいか。

男2 いいよ。

男2、トランプを切る。

女1 ……トランプ？

男2 えーっと、「はなたきんや」

名前の数だけトランプを切る。

男2 おいアケミ、苗字は？

女1 だで慣れ慣れしいんだよ。

男1 小川です。小川アケミ。

男2 「おがわあけみ」と。あとは「どこに行けばいいですか」と。

男2、トランプをバラバラに置く。

男1 あ、混ぜちゃうんですか。

男2 あ、うん。

女1 なんて切ったんだじゃあ。

男2 はい、一枚めくって。

男1 はい(一枚めくる)。

男2 なに？

男1 あ、いいんですか、言うて？

男2 手品じゃないから。

男1 クラブの四。

男2 ああ、クラブの四ね。うんとね、

男1 はい。

男2 くらぶのよん。くらよん。くらし。うん、いいよ、暮らし。暮らしの話になった。クラシック。

うん、いいよ。

男1 あの…

男2 くらーばーだからね、で四でしょ、だからね、四国。四国だ。

男1 ……

男2 四国がいいよ。

男1 ああ、四国。

男2 うん、こんなの出たよ。

女1 ねーよせ。

男1 あ、寝る？

女1 寝る、バカバカしいで。

男1 明日、早いですよね？

男2 ええ、早い方が良いです。夜明けと共に。

男1 じゃああの、お休みなさい。

男2 お休みなさい。

男1と女2、隣の部屋へ、

男2もついていく。

男2 布団、無いから、寝辛いかな、

男1 ブランケットありますし、車で寝るよりはよっぽど、

男2 それは良かった。

男1 あー、やっぱり畳はいいよね。

女1 …もう寝ますんで。

男2 あ、はい。

女1、襖を閉める。

男2は閉まる襖ギリギリの所にいつまでも立っている。

女1 …。

男2 本当に今日は、ありがとうね。

男1 いえ。

男2 独りで夜を迎えるの、不安で堪らなかったんですよ本当は。

男1 明日は、良い日が来るんですよね。

男2 ええ。

男1 じゃあ、お休みなさい。

男2 おやすみなさい。

しばしの間。

男2、襖をあける。

女1 何か？

男2 …変な事しないでよね、私の部屋で。

女1 するかバカ。

女1、襖を閉める。

男1 おやすみなさい。

男2 おやすみ。

しばしの間。

男2 欽也君、お話しませんか？

男1 …え？

男2 男同士、ざつくばらんに。

女1 寝ろよもう。

男2 そうだ、さっきの話、大学の、あれ、聞かせて貰えませんか？

女1 寝ろつつうの。

男1 …先、寝てて。

男1、男2の部屋に。

男2 やあ。

男1 わかりました。

男2 ありがとう。こんな夜は、お酒でもあれば、いいんですけどね、

男1 今日は引越したばかりですから。

男2 明日は、生活道具を買いに行きます。

男1 買わなくても、奥さんの所に帰ればいいじゃないですか。

男2 そつでした。さき、座つて。

一人 向かい合い座る。

男2 えーつと、大学生の頃？

男1 ええ、僕が、大学生の頃

男2 うん。

男2、横になつていく。

男1 当時住んでいたアパートから、

男2 うん…。

男1 川が見えたんですけど、

男2 川…？うん。

男1 赤い橋が掛かつて、細い、

男2 細い…、

男1 そこを毎朝、

男2 朝ね…

男2、仰向けになつた。

男1 …あ、寝ます？

男2 うん、眠たくなつて来ちゃつた。

男1 …ああ、

男2 そつ、私はずっと眠たかつたんですよ。ずっと、眠いのをこらえていたんだつた。

男1 あ、じゃあ、寝ますか？

男2 いや、聞かせてくれたまえ、君の大学生の、

男1 あ、はい。その橋を毎朝

男2 もつ眠たいんだ。

男1 …。

男2 …。

男2、寝ている。

男1 …こりゃあ、奥さん待つてないな。

女1 今頃気づいたんか。

男1、女1の部屋に戻る。

そして朝になつた。

男2、むつくり起き上がり、何かを確信する。

男2 おはようございます！欽也君、あけみ、おはようございます！

男1 …あ、おはようございます。

男2 開けていいですか？

男1 あ、どうぞ。

男2 (襖を開けて) おはようございます！

女1 うるせえよ。

男2 もう朝ですよ、たぶん。

男1 たぶん？

男2 窓がビニールシートで隠されてしまったのでよく分からないですよ。

女1 お前がやつたんだろ。

男2 今日はやっぱり気持ちの良い朝ですよ。こんなに気持ちの良い朝は久しぶりだ。私ね、今まで刑務所に居たでしようだから朝早いのは慣れてるんですけどね、今日はまるで違う。生まれ変わったよつです！

女1 うるせえつて。

男2 さあ立つて！今日はね、なんか良い事がある気がするんですよ。なんかよくわからないけど予感予感がもうビシビシくるんですわ。

男1 それは良かったですね。

男2 さき、立つて立つて、さあ立つて、立つて立つて、

女1 立つとるわもつ。

男2 (なんかの動きをしながら) はいっ、はいっ、はいっ、はいっ、

男1 …ん？

男2 (体操だった) いちっ、にっ、さんっ、しっ！  
男1 あ、いち、に、

男1も体操に付き合おうが、

女1 はよ行こまい。

男1 あ、じゃあ、行きましようか、

男2 んうええ、もういつでも行けますよ私は。いちっ、にっ、いちっ、にっ、

男1 ええ…。

女1 はよ。

男2 ええ、私ね、もう今すぐ外に行きたい気分なんですわ。上着なんか全滅要らないもん。

男1 それは凄い。

男2 いっち、にっ、さんっ、しっ、

男1 いっち、にっ…

女1 何やとんだ。

女1、ドアを開ける。

女1 …。

男1 …あ、雨？

女1 傘、持ってる？

男1 傘…。

男2、ドアを閉める。

男1 ？

男2 (安堵のため息をついて) 雨では、ダメですわ。

男1 え？

女1 は？

男2 雨の日にペランダでハンカチ干してる人は居ませんから、ええ(座る)。

女1 いちっしと干しとったら干しとるで、いちいち取り込まんでしょ。

男2 妻はね、雨が降ると必ず洗濯物を取り込むんです。  
女1 うん、たいていの人は取り込むだけだし、  
男2 だから今日はダメですわ。

男1 でもハンカチは、洗濯物じゃないですからね、

男2 そんなすーっとハンカチ干しとる人間はアホですわ。

女1 おいそんなん言ったらいかんがね、

男2 近所の人から良い笑いにされますわ。

女1 お前が言うな。

男1 ハンカチはただの目印ですから、使う訳じゃないですから、

男2 まあ今日はどっちにしろ、あきませんわ。

女1 なんて関西弁なんだよ。

男2 干してようが干してなからうが、干してないんですわ。

女1 昨日見に行くって言ったじゃん。

男2 雨ですよ？とさっきから言ってますよ私。

女1 んだてこいつ…。

男1 でも今日は良い日なんですよね？

男2 ええ。

男1 という事は、どういう事ですか？

男2 うん、私もそれをずっと考えておったんですがね、つまりそういう意味での良い日なのかもしれ

ませんな。

男1 え？

男2 今日はね、見に行かなくても良い日なんです。

男1 …え、え？

男2 いちいち見に行かなくても、分かるんですわ。そう考えると気が楽だ。今日は、見に行かなくても良い日なんです。見に行こうかどうしようか悩まなくて良い日。うん、今日はゆつくり過ごせようだ。

男3、やってきて、ノックをする。

女1 …大家さんじゃない？

男2 はいはい。

男2、ドアを開ける。

男3 おはようございます、私とこの角曲がったところに…

男2、男3の頭にビニール袋を被せる。  
と倒れる男3。

男1 あんた何やってんだよ！

男2 だってなんか言おうとしたからさ…

男1 この人昨日の人と違うよ！

男2 だってなんか言おうとしたでしょ？

男1 あーもお、どうしよう…

男2 ちよおそっち持つてえ！

男1 …

男2 ここに置いとく訳にはいかないでしょおが！

二人、男3をまた押入れに。

女1 …この人、ただの新聞屋さん。

女1、落ちた新聞を押入れに放り投げる。

男1 読売新聞…

男2 …私はね、中日ファンなんだよ。

男1 もうホント、いい加減にして下さい。

男2 …落ち着いたら、ちゃんと、ケジメはつけますんで、本当に。

男1 人の命をなんだと思ってるんですか！

男2 はい…

男1 「はい」じゃなくて…

男2 本当に、申し訳ない。

男1 …

男3、立ちあがり、再びノックをする。  
息を飲む一同。

男1 出て、くれる？

女1 …

男1、男2を抑える。

女1、ドアを開ける。

男3 おはようございます。

男2、飛びかかろうとするが男1が抑えている。

女1 ああ、おはようございます。

男3 このたびは、ありがとうございます（深々と頭を下げる）。

女1 ああ、いえ。

男3 どうかされました？

女1 あ、大丈夫です。

女1、外へ出る。

男3 えー、こちらが契約書ですね。

女1 あ、はい。

男3 ここにここにサインと印鑑を、こちらに割印をお願いします。

女1 ああ、はい。

男3 こちらは家賃で、敷金が三カ月分。

女1 はい。

男3 礼金なんです、今回は、いいです。

女1 あ、ああホントですか、ありがとうございます。

男3 お金はこちらに振り込んで頂くか、あの私隣に住んでますんで直接でも大丈夫ですんで。  
女1 あ、はい。

男3 いつくらいになりそうですか？

女1 あ、えーっと、あ、もうすぐ。

男3 わかりました。あの、

女1 はい？

男3 中の男性の方は？

女1 あ、えっと、友人です。

男3 おひとりで住まわれるんですよね？

女1 …あ、はい。

男3 良かった。このアパート、女性専用なんですよ。

女1 …あ、そうなんですか？！

男3 そうなんですよ。

男3、中を覗いて、

男3 基本的に男性の方の出入りは遠慮して貰ってます。

男2、飛びかかろうとするのを抑える男1。

女1 ああ…。

男3 中、綺麗にしたばかりなんで、住み良いとは思いますが。

女1 …はい。

男3 ちょっと行くのでつかいイオンもありますし、その角曲がったところには

男2 …！！

男1 さあ、そろそろ始めようかー！

女1 あ、はい。じゃあ、

男3 何か困った事あったら遠慮なく言って下さい。

女1 わかりましたー。

男3、玄関の床の辺りが気になるのかじーっと見ている。

女1 失礼します（ドアを閉める）。  
男3 …。

男3、去る。

男1 …勇作さん、落ち着いて下さい。

男2 …だって、なんか言おうとする人でしょあの人。

男1 似てるけど違いますから絶対。

男2 だって、だって…。

女1 ちよつと…、女性専用だってよ。

男1 言ってたね…。

女1 おいおっさん、

男2 はい。

女1 これ私が契約しんといかん流れじゃない？

男1 …うん。

女1 おっさん！

男2 お願いします。

女1 お願いしますじゃなくてさ、

男2 大丈夫ですよ、お金は、ちゃんとしますんで、

女1 お金の問題じゃなくてさ、

男2 家賃さえ、きちんと払っておけば、大丈夫ですからこういうのは

女1 だっておっさんお金あるの？

男2 それがね、あるんですよ。

女1 ホントかよ。

男2 ホント。銀行行けば、ありますから。

女1 …。

男2 あ、そういう意味じゃないですからねえ、もおやだなあすぐそういう風にもお。いや私ね、こっ  
見えて真面目に働いてましたからね、貯金もまあ自分で言うのもあれなんですけど人並み以上には  
あるつもりですから、ええ。

女1 …。

男2 さてと、こうして早起した事ですし、どうですか、そのちよつと行ったところにあるというでつかいイオン行きませんか？今日は何も考えなくて楽しく過ごして良い日です。イオンでいろいろ買い揃えないと、イオン銀行にも寄って、今まで助けて頂いた女、御礼させて下さいな。

男1 …いや、そんな御礼とか、

女1 じゃあそうして。

男2 はい。じゃあそうと決まれば行きましょう！ほら欽也君、車回して。

男1 …え？

男2 雨凄くから外、

男1 車すぐそこなんですけど、

男2 傘無いもの。

男1 …はい。

男1、車へ。

女1 あ、私も行く(後を追う)。

男2 お、仲良いなあ。お前ら仲良いなあ。モリゾーとキッコロ、二人はいつも一緒

車で、

女1 あの人さ、会社の社長でもやってたのかな。

男1 え、なんで？

女1 わがままだし、腰低いくせに態度でかいし。

男1 ああ、

女1 なんて刑務所入ってたんだろ、

男1 殺人でしょそりゃあ、

傘を差した女2、角の向こうからトボトボやってきて通り過ぎて行く。

部屋を出て来た男2、慌てて車に乗り込み、

男2 千恵子だよ…。

女1 は？

男2 千恵子、妻の、千恵子だよ。

女1 あ、今の？

男1 え？！

男2 千恵子だ、あれ千恵子だよ(頭を抱える)。

男1 良かったじゃないですか、まだ任んでましたね！

女1 え、奥さん気づいてた？

男2 …(首を振る)。

男1 良かったですね！

男2 何が良かったんですか？今のちゃんと見た？あんなしょんぼりしてさ、私が帰って来るのを楽し

みに待ってたらあんなにしょんぼりしてる訳ないでしょうが。

男1 そんなにしょんぼりしてました？

男2 あれはハンカチを掛けてないから、それを見た私が落ち込むだろうと思って気が滅入っているん

じゃないかしらね。

男1 考え過ぎですよ、雨だからですよ。

男2 千恵子は、心優しい女ですから…。

男1 あれですよ、雨の日はハンカチ掛けられないから、そのせいですよ。

男2 そうかな…。

女1 気になるなら見に行く？

男2 だから雨なんですよって、

女1 じゃあイオン行こう。

男2 すいませんが、私にはもう、ショッピングに興じる自信がない。

女1 は？

男2 さすがのつかいイオンも、今の私を盛り上げる事は出来ないと思われま。

女1 いやおじさんはいんだよ別に盛り上がりなくても、

男2 今日は家でトランプでもしましょう。

女1 バカか、なんで大の大人が三人揃ってトランプしなканのだ。

男1 仕方がないよ、今勇作さんを独りにしておくのが危険だ。

女1 じゃあ警察連れてけ。

男1 戻りましょうか、部屋。

男2 はい。じゃあそこまで車付けて。

男1 …はい。

男2 お先に。

男2、車から降りる。

と、女2が小走りで戻って来て、通り過ぎて行く。

女1 戻って来た。

男2、急いで車に戻る。

男2 (車に乗り) 千恵子だ、また千恵子だ(頭を抱える)。

男1 勇作さん、小走りになってましたよ。ちよつと元気になってます。

男2 何を言っとるんですか、あれはたまた忘れ物を取りに来ただけじゃないですか。忘れ物を取りに行く時はたいていの人は小走りになりますからね。

男1 ああ…

男2 当り前だろうがバカ。

男1 すいません。

女1 追っかけてみる？

男2 追いかけてどうするの？ハンカチも掛かってないのに「帰って来たよー」と言われてもいい迷惑でしょうが。

女1 まあね。

男2 これ以上私、千恵子に嫌われたくはないんです。

女1 じゃあ、イオン行く？

男2 イオンイオンうるせえなあお前は、どんだけイオン好きなんだ。

男1 そうだよアケミ、ちよつとイオンイオンうるさいよ。

女1 早いとこ御礼して貰いたいのは私。

男2 今日はどうあえずじつじつしていきましょう。こんなに千恵子がウロウロしていたんでは危険だ。じゃあお先。

男2、車から降りる。

と、女2が再び角から戻って来て、スキップをして通り過ぎる。

男2、車に戻る。

男2 ダメだ、私が車から降りると千恵子が出てくる(頭を抱える)。

女1 何をしとんだあの人も。

男1 良かったですね！今のは実に楽しそつだ。

男2 なにが良かったんですか？私が帰って来た時ならまだしもまた帰ってもいないのにあんなにはしゃいでいたら頭おかしいでしょう、千恵子もいい年なんですからね！

男1 だからそれは勇作さんの帰りを待ってるからウキウキしてるんじゃないや

男2 いつ帰って来るかも分からない相手にあんなにウキウキしてたら体力持ちませんぞ。あれは違う、もつと違う理由があるはずですよ。

男1 理由なんてなんでも付けられますからね、

男2 男が居るんじゃないのか誰か、一緒に住んでる男が…

男1 そうやって疑いだしたらきり無いですよ。

男4 角の向こうからやっつてきて、何かを探しているのかキョロキョロしている。

男2 そら出た、あいつだ！

男1 勇作さん！ダメですよあの人なんにも言おうとしてませんから、ダメです！

男1、男2を抑える。

男2 クソ、なんで急にこんなに人が出てくるんだ。

男1 朝だからですよ！

男2 …あいつ…千恵子を探してるぞ…

男1 憶測だけで人を判断してはいけません。

男2 千恵子がなんかお弁当かなんか忘れて、それを届けようと出て来たんじゃないのか…

男1 良く見て下さい、手ぶらです。

男2 いつまでキョロキョロしてやがる！

男1 勇作さんダメですつて！

男2 いつまでキョロキョロしてやがる！

男1 もうちよつとの辛抱です、すぐどこかへ行きますから。



男3、アパートの上から降りて来て、窓を叩く。

男3 (満面の笑みで) ここ、車止めないでね。

女1 ……、すいませーん。

男3 駐車場も要るのかな？

女1 あ、えっと、

男3 その角曲がったところに

男2 せいっ！

男1 勇作さん！

男3、自分でビニール袋を被り、倒れる。

男1 あんた何やってんだよ！

男2 だってなんか言おうとしたからさ…、

男1 どうしよう、三人目だ、どうしよう…、

男2 ちよおそっち持ってえ！

男1 ……。

男2 ここ置いておく訳だ

男1 はい！

男2 言われる前にやってよもっ！

男1 とりあえず車ですね。

男2 それしか無いでしょうが！

二人、男3を持ちあげ、車のトランクに入れ、また車に乗り込む。

男4、いつまでもキョロキョロしている。

男1 どう、見られてない？

女1 あんた見事に共犯者だよ。

男1 え？

男2 いつまでキョロキョロしてんだあいつは！

男1 ……ほんとですよね、そんな同じ場所を探してもしょうがないだろうに。

男2 ダメだ欽也君、またちよつとだけ時間経過した事にしているかな？  
男1 え？

男2 たまにちよこちよこ時間が飛んでる時あるでしょ。あれやっていいかな。

男1 ……そういう事、言わない方がいいですよ。

男2 だってこのままでは私、あの男をなんとかしてしまいたいんですよ。

男1 時間経過した事にしても、先の結果は変わらないですからね、今我慢しないとダメなんですよ。

男2 我慢出来ないかもしれないもの…、早く時間経過してよ。

女1 あんたらなんの話とんの？

男1 でもあの関係無いと思いますよ。

男2 もうそのキョロキョロやめてえ！

男1 知らないですよどんな未来になっても、

男2 頼むよ、早く時間経過した事にしてえ！

男1 ……わかりました。

部屋へ。

男4、自分で口にガムテープをして、両手を後ろに回す。

それを男1がテープで結び、両足にも巻きつける。

男4 んー！んー！

男1 ……結局こうなっちゃうじゃないですか。

男2 暴力を振るわなくて良かったよ。

男1 振るったんですよ、その描写を飛ばしただけで。

男4 んー！

男2 いやあ、これでしばらく安心だ。

男1 何が安心なんですか？

男2 はー、安心したらなんだか眠くなって来ちゃったよ。ハハ。

男4 んー！んー！

男2 さて行きますか、イオン。

男1 行ける訳ないでしょうこの状況で。

男2 じゃあ君も行く？イオン。

男4 んー！んー！

男1 どうするつもりなんですかこの人。

男2 いやいや、お騒がせしてすみませんでしたね。はいあ(横になさる)。

男4 んー!…んー!

男1 …こりやあ困った事になったなあ、

女1 ちよつと。

男1 なに？

女1 ちよつと(外へ)、

男1 でも今独りにしておくと、

女1 …。

男4 ん？

男1 あの人を助けてあげないと…勇作さんも。

女1 (ため息をつく)

男2 …。

男4 ん？

男1 すいません。あ、お時間大丈夫ですか？

男4 (うなづく)

男1 良かった。

男4 あ、うんうん!

男1 そうですよね…。

男4 うんうん!

男1 この辺りに、住んでるんですか？

男4 ん？

男1 この辺りに、

女1 テープ外さな。

男1 ああ。

男1、テープを外す、

男4 はい、その角曲がったところに

男1、慌てて男4の口を塞ぐ。

男1 すいません、ちよつと言葉選んで貰って良いですか? 「その角」とか言う言葉に敏感な人なん  
で、

男4 え？

男2 今なんか言おうとしなかった?

男1 この人、関係無いと思いますよ。

男4 …ん?…ん?

男1 すいませんねホント、

男4 …ん?

男1 ほら、幸せの黄色いハンカチって映画あつたじゃないですか、あれの真似して、手紙送ったんで  
す、奥さんに。

男4 (うなづく)

男1 あ、この勇作さんがね。

男4 うんうん。

男1 家まですぐ近くのところまで来たんですけど、なかなか最後の一步が出ないみたいで、

男4 …うん。

男1 …。

男4 ん?

男1 それまでここに住んでるんです。

男4 …ん?

男1 困った人ですよ。

男2 …。

男4 あの。

男1 …はい?

男4 それと僕になんの関係があるんですか?

男1 …?

男1、テープの上からテープを貼る。

男4 ん?

男1 …。先ほどあなた、あそこで何か探してましたよね? あれは何を探してたんですか?

男4 ジュースですよ。

男1 …。

男4 ジュースを探していたんですよ。

男1 …これダメだな、思いっきり何言ってるか聞こえてしまっ、よくドラマとかで使ってるテープはよっぽど粘着力が強いんだな。

男4 …え？

男1 あ、なるほど、ジュースをね。

男4 僕はただジュースを探してただけなんですよ。ジュースの売っている自動販売機を。

男1 千恵子さんではないんですね。

男4 千恵子さんで誰ですか？僕は本当にジュースを探してただけなんですよ。

男1 良かったですね勇作さん、ジュースを探してただけなんですって。

男4 最近はずっかりジュースの売っている自動販売機が少なくなってきたよ。僕はジュースが飲みたいのにジュースが売ってないんですよ。

男1 あ、何ジュースですか？

男4 やっぱりオレンジがぶどうですよ、ジュースって言うくらいですからね。

男1 ああそういう事か、スポーツ飲料はジュースじゃないですもんね。

男4 コーラはジュースじゃないですよ。

男1 …ファンタは？

男4 ファンタもジュースじゃないですよ、果汁が入ってませんから。

男1 ああ。

男1 なるほどね…。

男4 ジュース買って来てって言うてるのに炭酸飲料買って来るバカ居るんですよ。僕はジュースだって言うてるのにジュースとジュース以外の飲み物の区別もつかないんでやがるんですよバカが。

僕はジュースが飲みたいって言うてるのに、ジュース以外の飲み物ばかりでジュースはどこにあるんだって言うね、

男2 君なんかジュースジュースうるさいなあ。

男4 …だって僕には本当に何が何やらわからないですよ、ただジュースを買いに出ただけなのに、

男1 この人は嘘をついてないと思いますよ。

男4 ジュース買いに出ちゃダメなんですか？

男2 …。

男4 僕はただジュースを買いに出ただけなのに…！

男2 なんだろう、イラッとするなあ。

男1 (男4に) すいません、ちよっとジュースから離れましょうか。

男4 だって僕はジュースの事しか知らないんですよ、他の事はもう何が何やら、

男2 (立ち上がり) 今も飲みたいですか、ジュース？

男4 そりゃあ、それどころじゃないのは分かってますけど、飲みたいですよ。

男2 じゃあお前をジュースにしてやるよ。

男2、ポケットからビニール袋を出す。

男4 っ！

男1 勇作さん！(袋を取り上げる)

男4 っ！

男1 この人は関係ない人なんですよ！

男2 どう、千恵子は、元気かい？(袋を取り出す)

男4 っ！

男1 幾つビニール常備してるんですか？

男2 ちゃんとご飯作ってくれるかい？

男4 千恵子さんで誰ですか？

男2 私の時はね、ちつともご飯作ってくれなかったよ。

男1 この人はジュースを買いに出ただけなんです！

男4 うんうん！

男2 私は毎日仕事して、千恵子は専業主婦なのに…、朝は私より遅く起きて、夜は私より早く寝る。

そんな人でした。

女1 いやもっさあそれ終わってるでしょ夫婦関係

男2 それでも私は幸せでした。

男4 っ！

男1 そういふ夫婦だつて居るよ。

女1 おじさんだつてもうハンカチは掛かっくらんって思つてるんですよおっだからこうやって理由

見つけて先延ばしにしてるんですよ。

男2 …。

女1 奥さんはこの人と新しい生活を送つてるんだよ。だつたらもうおじさんの事は待つたらんのだ

わ。「もしまた独り暮らしで」って書いたんでしょ？

男2 ……

女1 終わりでしょ。

男4 ん？…ん？

男2 ……

男2、座る。

男1 いや違うよ。

女1 おい余計な事言うなよ。

男1 だって全嫉違うよ、アケミが言ってるのはこの人が千恵子さんの新しい人って事が前提になつてるじゃないか、だけどここの人は全く関係の無い人なんだ。そうですよね？

男4 ……ん、どつちいう事？

女1 うんだからおじさんがそうやって思ってたからいいじゃんって言つとんの。

男1 本当にそれでいいんですか？

女1 いいんだって、それで諦めがつくんだ。

男1 まだ見てないんですよ？あなたの目で、あなた自身が。諦めるのは早いんじゃないですか？

女1 良い頃合いだと思っよ。

男1 見ないで諦めるなんて馬鹿けてる。

女1 馬鹿けてるんじゃないよバカなんだよ。

男1 こつこついう時はみんなバカになるんだよ、みんなバカばかりだよ。

女1 もう何言つとんのかわつからへんもんでもうええわ、バカ二人相手にしとつてもしやあない。は

よイオン行。

男1 もう止めてそういう口汚い名古屋弁織り交せて喋るの。

女1 いつまで付き合う気なの、いい加減にしなかに。

男1 分かつてるよそんな事。

女1 分かつたらんもんでおっさん調子に乗つてまつとんだがね。

男1 もうホント止めて名古屋弁、気づいてないと思っけどすげえスタックカート効いてるからね。なんか飛び跳ねてるみたいだからね。

女1 何訳分からん事言つとんだ。

男1 ほらあ。

男2 お二人とも、喧嘩は止めて下さい。分かりましたから。

女1 ……何が？

男2 そうですよ、まだ、ハンカチ見てませんもんね。ハンカチが掛かっている以上、私を待っているという事ですよんね。

男1 そう、そういう事ですよ。

女1 奥さんはこの人と暮らしてるんでしょ？

男4 ううん、ううん！（首を振る）

男1 違いますよ。

女1 暮らしてないんだつたらこの人解放してあげやあよ。暮らしてるんだつたら奥さんの事は諦めや

あ。

男1 うん、まあ、そうですね。

男4 ううん！

女1 どつちなの？

男2 ん？

女1 ん、じゃねえよ。

男2 私にとつて大事なのはハンカチが掛かっているかどうかです。千恵子が誰と暮らしようが関係

ない！

男1 ……ん？

男4 ……ん？

女1 いやいや、違う人と一緒に暮らしてるのになんでペランダにハンカチ掛けるの？どつちいう神経？

男1 そうですよ勇作さん、さすがにそれはおかしいですよ。

男2 千恵子は、そういう女なんだ。

男1 え？

男2 平気で二股掛けるんだ。

女1 ……あのね、

男1 なんですかそれは、そんな女こつちから別れてやりましようよ！

男2 そうだよ、その方が清々するよね。

男1 そうですね。

男2 私はね、二股とか許せんですよ、一番。

男1 僕ですよ。

男2 二股掛ける女は、ぶち殺してやりますよ。

男1 うんこれ以上罪を重ねるのはやめましょう。  
 男2 二股かけるなんて、全くどういふ神経してやがる。  
 男1 全くです。  
 男2 (男4に) いいかい、ハンカチを掛けるという事は私を待っているという事なんだからな。  
 男1 そうだぞ。  
 男4 ん？  
 男2 私が帰ってきたら君とは別れるつもりだったんだよ。千恵子も人間だ、不安な時もあったらう。  
 所詮君は私が居ない間のタダのボディガードみたいなもんささまあみろ。  
 男1 さまあみろ！  
 男4 …ん？  
 男1 あ、こつちから別れてやるんじゃないんですか？  
 男2 千恵子を不安にさせた私にも責任はある。だから千恵子の事は許してあげましたよ。  
 男1 …早いなあ、切り替え。  
 女1 こりやあダメだ…、  
 男2 危うく本来の目的を見失う所でした、ありがとうございます。欽也君。  
 男1 いや、いいんですよ、なぜなら僕も大学生の頃  
 男2 ありがとうございます！  
 男1 はい！  
 女1 せつかく諦めたと思っただのにまた振り出しか。  
 男1 だって、勘違いなんだから…、  
 女1 じゃあこの人どうすんの？  
 男4 ん？  
 男1 …すいません。あなたの身の潔白を証明する事出来ませんでした。  
 男4 …ん？  
 外では男3が(スーツ姿 傘をさしてやってきて、ビニールシートの窓を見つめている。  
 男1 どうしましょうね、  
 男4 …はい。  
 男1 だから、話を整理しますとね、  
 男4 はあ。

男1 あなたは、ハンカチが掛かってたら解放されて、掛かってなかったら…  
 男4 どうなるんですか？  
 女1 千恵子さんと暮らすんですよ？  
 男1 …うん。  
 男4 …千恵子さんで誰ですか？  
 傘を閉じ、アパートの周囲を歩き、部屋の前までやって来る。  
 そして中の様子に聞き耳を立てる。  
 男4 あのお？  
 女1 でもほ掛かってないと思うから…、  
 男4 …ん？  
 男1 もうこの話止めよっか…、  
 女1 めんどくせ。  
 男4 いや、止めないでください。  
 男1・女1 …。  
 男4 もしもし？  
 男3、ノックをする。  
 息を鎮める一同。  
 男3、再びノック。  
 男2、立ちあがる。  
 男1 (小声で) 勇作さん(制する)、  
 男2 …。  
 しばしの間。  
 男3、電気メーターを確認して、しゃがんで踊り場を確認している。  
 女1、覗き穴から外を見る。  
 男1 (小声で) 誰？

女1 …居ない。

男1 …。

男4 …ん？

男1 勇作さん…、

男2 …ん？

男1 もつ、時間が…、

男2 …。

男1 早く見ないと、…この先、幾ら見たくても、見られなくなっちゃいます。

男2 …。

男1 どうするつもりなんですか？

男2 お腹、空いたね。

男1 勇作さん、

男2 朝から何も食べてないでしょ？鍋しよう。ね、鍋買って来て、鍋ごよ。あとコンロも。

男1 勇作さん、

男2 ケジメは、ちゃんと付けますから。ひとまず、

男2、トランプを切る。

女1、ビニールシートを外しにかかる。

男1 アケミ…。

男2 はい(カードを)持って、ババ抜き。

女1 (外して)どーどーこのマンション！どれもペランダこつち向いとるがね、どーにも黄色いハン

カチ掛かつとらんよ。

男4 あ、僕のマンションはですね…

女1 あんたのマンションはええんだわ。

男2 ほら青年(男4)、選んで。

女1 もお、奥さんのマンションどれ！

男2 (男4にカードを見せながら)じゃあコレとっいていい？

女1、部屋を出て行く。

男1 アケミ…？

男2 カレー鍋がいいよお、今日は。

男1 …。

縛られた男4とババ抜きをする男2。

女1、階段降りた先にはまた男3が居る、

男3 ああ。

女1 …あ、はい？

男2 ほら、欽也君、座って。

男1 (座る)…。

男3 大家さん、ここの、見てないですか？

女1 …あ、え？

男3 大家さん。

女1 大家さん、は…、

男3 私、兄なんですけど。

女1 …あ、ああ、

男3 約束の時間に来ないのでどうしたのかなと思って。

女1 …あ、ごめんなさい、ちよつとわからないです。

男3 そうですか…。

女1 失礼します…。

男3 …。

女1、角の向こうへ駆けて行く。

男3、見送り、去る。

男2、ババ抜きをしている。

男4 あのお、どうして見に行かないんですか？

男2 あ、ジュース頼めば良かったかな。

男1 こんな感じなんですつと。もうすぐなんですよ、ホントすぐなんです、その、あの、アレを曲がれば見えるんです。と思っんです。…なのに行かない。

男4 ……

男1 絶対見に行った方が良いと思うんですよ。結果はどうであれ絶対プラスになるはずなんです。

まあ、なぜ僕がここまで言うかという、実は僕、大学生の頃にですね、

男4 僕も大学生の頃、ボクシングやってたんですね。

男1 ……ん？

男4 ボクシングってストイックな格闘技じゃないですか。かのモハメド・アリも試合前は禁欲してその爆発力で闘争心に火を付けていたと言われています。あなたもそれと同じ事をしているんじゃないんですか？

男1 (鼻で笑って) いや、勇作さんはボクシングみたいな事はしていませんから、ウジウジダラダラしているだけですから。

男4 かの名優・渥美清は売れる為に禁煙煙を誓ったと言います。人はこぞと云う勝負どころではそういう願掛けをする人が多いです。それとは違いますか？

男1 (男2に) 願い事なんか特にはないですよええ？

男4 あるじゃないですか、ハンカチが掛かってますように言う願いが。

男1 でも見に行くまで分からない物を見に行かない事で願掛けするってどういう事ですか？

男4 どういう事は、それは…。

男1、男4の足のテープを取ってあげる。

途端、一斉に笑う。

男2 ははは、なるほどねえ。

男4 それは面白い話ですね、あはは。

男2 まさか君の大学生の頃、そんな事があったなんてねえ、ははは。

男1 そんなに笑われるとは思ってなかったんですけど、

男4 人の不幸ほど滑稽だと言いますからね、

男1 ああ…

男2 良くぞ話してくれました。

男1 でもちやうど、時間が飛んだっばいんです。

男2 あはは、そうなの？

男1 はい(うなだれる)。

男2 え、今何時？

男1 何時だろう、時計が…

男4 だいたい二時ちよい前ですね、ははは。

男2 ほら出たよ、こんな事も分かるんだよボクシングやってると。だはははは。

男4 あはは、あはは。

男1 遅いなあアケミ。歩いてイオンまで行ったのかな…(ポケットを探る)

男2 これがどん臭い女なんですすよ、ひひひひ。

男4 あはは、さっきのずんぐりした。

男2 ええ、あははは。

男4 あははは。

男1 あれ？あ、差しっぱなしだ…。

男2 車？あはは。

男1 ええ。

男1、立ちあがり、窓の外を見る。

男2と男4はいつまでも笑っている。

男1 アケミ、もしかしてハンカチ見に行ったんじゃないか…

男2、突然外へ駆け出す。

男1 勇作さん？！

男2、車に乗り込む。

男1 (後を追う) あー！

男2の運転する車はそのまま水路に落ちた。

男1 (慌てて駆け寄り) あんた何やってんだよ！

男2 (這い上がり) …私、免許持ってるんですよ。

男1 じゃあなんで運転したんですか…！あーあ

男4も外に出て来ていて、

男4 こりやあレッカー呼ばないと…。

男1 僕のファミリアが…。

男4 ファミリア、良く持っていましたね。

男2 ちょっとそっち持ったら、持ち上がりませんか？

男1 無理ですよそんな、人と重じや違うんです。

男2 そっですか。

男1 僕も自分で何を言ってるんだ…。

男2 本当に、申し訳ありません。

男1 あなた謝ればいいと思ってるでしょ…。

男2 そんな事は、決して、

男4 どこ行くつもりだったんですか？

男1 逃げる気だったんですよ、アケミが帰って来る前に、どこまで往生際が悪いんだ。

男2 あ、イオン…。

男1 …。

男2 モンブラン買いに…。

男1 もうお願いですから、見に行ってください。ホントお願いします。

男2 明日は、必ず。

男1 そればかりじゃないですか！

男2 時間 ありませんから。

男1 …本当ですね、信じていいんですね。

男2 はい。…雨も、上がりました。

男2と男4、ちょっと離れた所に移動する。

男1、頭を下げる。

男1 ありがとうございました。

男2 レッカー代は、お支払い致しますんで。

男1 修理代もお願いします。エンジン掛からなくなっちゃったんで。

男2 えっなんで？

男1 打ち所が悪かったみたいです。

男4 あのファミリアじゃあね。

男1 大事に乗って来たのに…。

男2 どれだけ大事にしても、いつかは壊れますから。

男1 あなたが言わないで下さいそういう事。

男2 本当に、申し訳ない。

男1 すく謝るんだよな。

男2 はい。

男1 「はい」って…

男4 つまり大事にしたかったら、大事にしないという事ですか？

男2 …ん？

男4 あ、すいません。

男2 いや、そういう事が言いたかったんだよ私は。

男4 やっぱり。

男1 あけみ、どこ行っちゃったのかなあ(レッカーの去った方を見送り)…あ！

男2 欽也君

男1 …ああ！

男2 うるさいですよ。

男1 トランクに、…トランクに積みっぱなしだ、

男2 …。

男1 …。

男4 何を？

三人 手にマクドナルドの飲み物を持ち、前方を見つめている。

男2 どう欽也君？町が一望出来ますよ。気持ちいいですよお。

男1 勇作さん、

男2 どう、いいでしょお。

男1 あれから三日も経ちましたよ。いつ見に行くんですか？

男2 いやあ(こんとこをずっとと天気が悪かったからね、今日は久しぶりに晴れ間が見える。虹が見え



るんじゃないかしら。

男1 虹よりも、ハンカチを見て下さい。

男2 ここはね、千恵子と一度、一緒に来てみようかと話してた場所なんだ。こうして来てみると、懐かしいと思う訳ないよね、だって来た事ないんだから。

男1 なんなんですかその話。はあーあ、アケミも帰って来ない、どこに行ってしまったんだ…。

男4の口に貼られたテープの真ん中には穴が空いている。

そこにストローを突っ込む男1。

男2 あいつも大人ですから独りで生きていきますよ。

男1 もう帰って来ないみたいない言い方しないで下さい。

男2 うるさいからちようどいいよ。

男1 アケミはすぐ浮気するんです、僕がこんなだから。

男2 欽也君は、良い男ですよ。

男4 そんなにモテるようには見えなかったですよ。

男2 だよね。

男1 アケミのどこがいいのか、その辺のところは僕も良く分からないんですけど、

男4 だからこそいいんですよ、お二人の関係は、という事ですよ？

男2 そうですね、けどもう別れてしまいたくないあんな女。

男4 なるほど、その関係すらも要らないと！そうか…。

男1 もう慣れつこになっちゃってるんですよ。日本全国旅を続けて来て、アケミが浮気する度に足止め食らうんです。どっちみち行く当てなんかないからいいんですけどね。その間僕は働いてお金を貯める事も出来るし、アケミも戻って来るとなせかお金一杯持つてるんです。そうやってやりくりしてますね。

男2 君は？

男4 僕ですか？

男2 どういう人なの？大事な事を聞くの忘れていた。

男4 僕の事はいいじゃないですか。

男2 (即) そうか。

男4 以前の僕は、

男2 いいや時間が無いから。君がどうという人間だったかなんて話を聞いてもね、だからなんだと言う

話にしかならないからね。

男4 はい。でも…

男2 時間が無いんだ。

男4 はい。

男2 欽也君(ストローを)。

男1、男4にストローを突っ込もうとする。

男4 ああ、もう結構です。あんまり飲むとおしっこしたくなっちゃうんで。

男1 ああ。

男4 ありがとうございます。

男1 どうやっておしっこしてるんですか？

男4 …。

男1 もしもし？

女1、やってきて、

女1 そこから見えるの？奥さんのマンション。

男1 アケミ！

女1の後ろから男5がついてくる。

女1 三階建の、赤茶色のマンション、ミレニアムノースって名前の。

男4 あ、僕のマンションですよ。

女1 (男2に) そこに住んでるでしょ、奥さん。

男2 …。

男4 同じマンションなんですか？

女1 ベランダに黄色いハンカチ掛ける部屋、今まで見た事ある？

男4 赤いバスタオルなら見たことがあります！

女1 黄色いハンカチね。

男4 黄色は…

男2 お前とこ行ってたんだ。欽也君を心配させて、バカ者。

男1 あの人お金持ちそつだね。税理士かなんか？

女1 刑事さん。

男1 ……

男4 (小声で) 勇作さん…。

男2 ……

女1 奥さんの部屋も知ってるよ、三〇三号室。

男4 僕の上の部屋ですよ！？

女1 ベランダに、黄色いハンカチは、掛かっていませんでした、とき。

男2 ……

男1 勇作さん？

男2 最初から申し上げている通り、私は私が見た事以外は信じない人間なんで。アケミが何を言おう

が、所詮アケミが言ってる事なんで、ええ。

女1 まあそう言うとは思ってたけど、

男2 本当に、不器用な人間なんで、ええ。

女1 じゃあ自分で見に行くしかないよね。

男2 はい。

女1 いつ行くの？

男2 しかるべき時に、しかるべき方法で、

女1 行く気ないでしょ？

男2 はい。

男1 ……え「はい」って言いました？

女1 初めから見に行く気なんか無かったんだよ。

男1 そんなんですか？

男2 (やや声を大きく) 私はね欽也君、ハンカチは掛かっていると思っておりますよ。

女1 無いんだけどね。

男2 しかしハンカチというのは、見に行くと無いんです。

男1 ……え？

男2 見に行くと、「ある」か「ない」か、このどちらかしかありませんが、見に行かないと、「ある」と「ない」が半々の状態で存在するんですな。

男1 ……ん？

男4 これは、哲学ですよ。

男1 え？

男2 私もね、「ある」確率の方が高いと踏めば見に行くでしょうが、おそらく「ない」だろうと思ってるので、だったら見に行かない方が「ある」可能性が高いんです。

男1 ……え、え？

男2 つまり見に行かない限り、「ある」んですな。

男1 え、どういう事ですか？

男4 僕もこの前身体拭いて貰ってる時に聞いたんです、最初は訳が分からなかったですよ。でも段々とその意味が理解出来るようになりました。

男1 ……ごめんなさい、今こんな事言うのはおかしいとは分かってるんですけど、え、身体拭いて貰ってるんですか？！

男2 私があの角を曲がらないうちは、ハンカチは掛かっているんです！ハンカチを見に行ったのはアケミであって、それを「ない」と判断したのはそれはアケミの問題であって、私の中ではまだハンカチは「ある」んです。

女1 つまり自分でも「ない」って分かっているって事でしょ。

男5、男4の腕のテープをほどこうとする。

しかしそれを振り払い自力でテープを引きちぎろうとする男4。

男4 この人は「ない」ものを「ある」と言うし逆に「ある」ものを「ない」とも言える。それはこれからの世の中を生きて抜いて行く為の大切な思考です。現代は情報社会と言われておりますがその情報ほどの嘘で出来ているという事になぜ気づかないのだとこの方は言う。なぜ多くの人は実際見もしない物事に「喜」「憂」出来るのか？嘘の社会で育った我々にはもはや嘘と本当の区別すらつかなくなってきたのか？その子供達は嘘でコントロールされてしまっているのか、その先の未来にはもう本当の事など無くなってしまうのか、本当の人間とはどんな人間だったのか、本当の人間達はどうな人間になりたかったのか！この方はそれを考えるきっかけになりうる人です、近い将来必ず訪れるであろう圧倒的な絶望感を幸福に替える事が出来る人なのです。

男4、引きちぎるのは無理だったみたいで、諦めた。

女1 ……ほとんど何言ってるのかわかんないなあ。

男4 まるで、幸福の錬金術師ですよ。

男2 そついう事だね。

男4 占って下さい、未来を。

男2 いいよ。

男2、トランプを切る。

男1 勇作さんは、ハンカチが掛かっている事だけで良かったんですか？その先の事は考えてなかったですか？

男2 その先の事を考えても、ハンカチが掛かっているという今の幸福感に比べれば下がる可能性の方が高いですから、今が幸福感のピークです。私はこの状態を出来るだけ長く維持していこうと思っておりますよ。

男4 「しまゆうさく、あしたはいいひですか？」

男2 今日のように幸福な日が、これからもずっと続く。そういう事になったんです。

男1 …もう絶対、見に行かないんですか？

男2 はい。

男1 …。

男4 見ないうちは、ありますからね。

男1 …何しにここまで来たんですか？その為に何人の人を犠牲にして来たんですか！見ないつもりなら来なければ良かったじゃないですか！

男2 見ない訳にはいかないので、手紙出しちゃったんで。

男1 でも見ないんですよね？

男2 はい。

男1 …。

男2 見に行くと、無いんで。

男1 …なんてこった。

男5、来た道を振り返り、去る。

男4 …僕が全部やった事に。

男2 バカな事を言うんじゃないよ。

男4 でもあなたは…

男2 そんな身体で何が出来る？縛られた男の言う事なんか、誰も信じちゃくれませんよ。

男4 あなたが僕を捕まえた事に。

男2 君には未来がある。(カードを引き) ほら出たよ、良いカードだ。ほら見て。

男4 …これは、良いですね。

男2 ダイヤの9。

男4 はい。

男2 第九、喜びの唄。

男4 はい。

男2 大工さん。

男4 …喜びを建築するんですね。

男2 そもそもダイヤってのが良いんですよ。

男4 ダイヤモンドですね。

男2 ううん、大きいダイヤでダイヤ。

男4 あ、ああ、どこへでも行けますね。

男2 いいよ君、良い感じだよ。

男4 はい！

女1 まあ幾ら口で言っても分からんだらうとは思ってたから、

女1、振り返ると、その先から女2がやってくる。

男2 …。

女2、傘を差したまま微動だにしない。

男2はゆっくりと視線を外す。さほど驚いた様子もなく、落ち着いて見える。

女1 奥さんの、千恵子さんです。

男4 ああ…。

女1 (男2に) 直接聞いてみましようか、奥さんに。

男1 アケミったら君はどうしてそんなにいじめっ子なんだい？

女1 ベランダに黄色いハンカチ干してます？

女2、傘を閉じ、じっと男2を見ている。

男1 そつだ、奥さんは黄色いハンカチが恥ずかしいんじゃないですか？勇作さんもそう言ってたじゃないですか、今時黄色いハンカチなんてみつともないって。だいたい黄色いハンカチなんてどこに売ってるんだ、僕は見たことない。

女1 黄色い布でも良かったんですけどね

男1 黄色いハンカチを掛けてると、一人暮らしの二途な女性が誰かを待っているってアピールしているよつなもんだ。防犯上とてもよくない。

女1 もつええて。

男1 そつか、「ペランダに干してない」って事は部屋干ししてるんじゃない

女1 もつええつちゅうの。

男1、うつむく。

男2、おそらく「唐獅子牡丹」を鼻歌で歌っている。

誰かが伴奏を口ずさんでいるように聞こえる、おそらく男らだ。

男4 あの方にはもう、奥さんがハンカチを掛けてる掛けてないはどうでもいいことなんです。

女1 (女2に) あの人近くに部屋借りて住んでるんですよ、気持ち悪いですよ。

男4 あの方には眼下に広がる黄色いハンカチが見えている。そつやつつ、ザーッと干していないハンカチを探していたんですね。

女2、ようやく前に進み出る。

男2、歌をやめる。

女2 …お久しぶりです。

男2 …ん？

女2 …。

男2 そつだ、紹介しよう、欽也君と、アケミと…、君は…？

男4 あ、僕は

男2 私の弟子だ。

男1 弟子…？

女2 デシッ (男2のお腹を殴る)

男2 …この二人には、

女2 デシッ (男2のお腹を殴る)

男2 大変世話になってね、私を、

女2 デシッ (男2のお腹を殴る)

男2 ここまで送ってくれたんだ。

女2 (男4に) マックシエイク？

男4 あ、ジューズです。なにジューズかと言つてアップルです。

女2 …。

男4 …ん？

女2、ポケットを探る。

と、紙くずとかいろいろ出てくる。その中に赤い布きれもあつて

男1 赤いハンカチ…、

くしゃくしゃに丸められた手紙を取り出し、

女2 はい (男2に)。

男2、それをちよつと開いて、

男2 …鼻 嚏んだ？

女2、赤い布きれとかもつものを拾う。

男4 あの、先生…、

男2 …なんだね？

男4 赤い、バスタオルが干してあるなあと思つたのは、赤いシーツみたいなのが上から垂れていた時があつて、上の階の人はなんなんだろうなああつて思つたからなんです、

男2 千恵子は赤が好きなんですよ。  
女2 赤井英和？

男2 まあ、そうだね。

女2 デシッ。

男2 ああ、元ボクサーだからね。

女2 デシッ。

男2 お、いいパンチだ。

男2の頬を思いつきりビンタする。

男2 ……

女2、去る。

しばしの間

皆 呆然。

男4 ……先生？

男2、ストローを啜えて飲むが「スズズ…」からっぽだ。

男4 ……あ、どうぞ。

男2 そういふのダメなんだ私は。

男4 ああ…。

間。

男2 欽也君、アケミ、本当に、今までご迷惑お掛けして申し訳ありませんでした。

男1 ……あ、いえ。

女1 うん。

男2 君も、申し訳なかったね。

男4 先生…。

男2 じゃあ行きますか、ゴリさん。  
男5 もついいの。

男2 はい。

女1 ……(男5に) 知り合いだったのね。

男5 じゃあ行こう。

男4 待つて下さい。

男5 ん？

男4 僕が、やりました。僕が全部やっただんです。勇作さんは、僕をかばってくれようとしているんです。

男2 行きましょう。

男4 お願いです、信じて下さい。無実の人を裁かないでください。

男2 もついいんだ、何も言わな。

男4 いや言います！

男2 行きましょう。

男4 僕がやっただんです、僕が全部やっただんです。

男2 ……そんな事は、今ここで言わなくてもいいんだよ。

男4 ……え？

男2 そんなに言うど、なんか私をかばってるみたいに見えるじゃないか。

男4 ……あ、じゃあどうしたら？

男2 どうしたら、とか言っくんじゃやないよ。

男4 すいません。

男2 だからもついいんだ、君はまだ若い。私が捕まった方がずっと良い。

男4 いや僕が、

男2 ゴリさん、彼の言う事は、聞かなくていいですから。

男5 わかった。

男2 いや、せつかくですから聞いてやってもいいかもしれません。

男5 あとで聞くから。

男2 ほらなんか言い給え。

男4 僕がやっただんです！

男2 どう思いますか？

男5 あとで。

男4 僕がやったんです！

男2 ここまで言ってるんですよ。

男5 あとでね、

男2 君はなぜ本当の事を言ってしまうんだ。私がやったで良かったじゃないか。

男4 いや僕がやったんです！

男2 なぜ君は、本当の事を…、

男4 僕がやったんです！

男2 こいつは本当の事ばかり言うんですよ。

男5 あとでゆつくり聞くから。

男4 僕がやったんです！

男2 お前がやったんだな。

男4 はい！

男2 だそつですよ。

男5 うん、あとで。

男2 お前がやったんだな？

男4 はい。

男2 だそつですよ。

男5 あとで。

三人その場を離れて行く。

女1 なんだ今の茶番劇…。

男1 やつと終わったね。なんだか凄く日が経ったような気がするけど、たった四日しか過ぎてないんだよね。

女1 あんたのせいだからね。

男1 …え？

女1 だからあんなおっさん乗せるの止めようって言ったのに。

男1 …うん。

女1 どうすんの、これから。

男1 どうしようね。

男5 おーい、君達もだよ。

男1 …はい。

二人も合流する。

男3がやってくる。ここは最初の道。

男5、男3の元へ行くようにするが男2が動かないので、

男5 どうした？

男2 …いや、あの人、なんか言う人ですよ？

男5 そりゃあなんかは言うよ。ほら、乗って。

皆、男3の後ろに並ぶ。

男2、ポケットを探る。

男1 勇作さん、パトカーの中なんですからね。

男2 …。

男5 (男3に) 出して。

男3 …。

走りだすパトカー。

女1 あ、角曲がる…。

女2、ベランダに現れる。

男5 ここを止めてくれ。

男3 …。

パトカー、停まる。

男5 俺はここで二服するんだ。

女1、見上げて、

女1 なんだか、めんどくさい夫婦だなあ。

男1 その言う夫婦も居るんだよ、最近は。

女1 分かった風な事言つて。

男4 それでも通じますよ、しっかりと。

女2、洗濯物を干して行くが、黄色いハンカチは出て来ない。

男4 ほら先生、見て下さい。干してないのに干しています。

男2 ；（ヘランダを見上げる）。

女2、赤い布を干す。最初はバスタオルサイズ。

赤い布をどんどん拡げていく。

男2、車から降りる。

男1 勇作さん？

赤い布はどんどん大きく拡がって行く。

皆、車から降りて見上げる。

男2、うなづき、優しく微笑んだ。

男5も車から降りて来て、男2の肩を叩き、涙ぐむ。

男3も降りて来て、背後から男2の頭にビニール袋を被せた。

〜終〜

【上演記録】

2013年11月29日～12月1日 王子小劇場〔東京公演〕  
2014年2月27日～3月3日 七つ寺共同スタジオ〔名古屋公演〕



この戯曲の著作権は、作者である平塚直隆にのみ帰属するものです。  
上演許可あるいはその他のお問い合わせは、作者の所属する「オイスターズ」へどうぞ。

■ オイスターズ ■

ホームページ

<https://oysters.official.jp>

メールアドレス

[theatrical\\_unit\\_oysters@yahoo.co.jp](mailto:theatrical_unit_oysters@yahoo.co.jp)